［課程―２］

審査の結果の要旨

氏名　　上野　治香

本研究は、医師とのコミュニケーション、健康管理や治療のアドヒアランスの改善にもつながることが指摘されている患者の「健康に関する情報を活用する能力」であるヘルスリテラシーに着目し、日本の 2 型糖尿病患者を対象に、患者のヘルスリテラシーが、心理社会的要因、医師とのコミュニケーションや自己管理などの行動、ヘルスアウトカムにどのように影響するのかを縦断的に包括的に検討することを目的に解析を試み、下記の結果を得ている。

1. ベースライン(T1)ヘルスリテラシーが、3 か月後(T2)、6 か月後(T3)の心理的社会要因、行動、ヘルスアウトカムに及ぼす影響

糖尿病理解度、自己効力感、医師とのコミュニケーション、服薬アドヒアランス、運動・食事において、ヘルスリテラシーの中でも機能的ヘルスリテラシーよりも高次のヘルスリテラシーである伝達的ヘルスリテラシーや批判的ヘルスリテラシーが特に有意な関連を示した。これは先行研究とも一致する結果である。特に、伝達的および批判的ヘルスリテラシーを向上させていくことが、患者の糖尿病の療養行動に対する理解や自己効力感を向上させ、患者の服薬アドヒアランスや運動・食事といった実際の自己管理を向上させる可能性があることが示唆された。機能的ヘルスリテラシーは、特に感情負担度や治療満足度に対しても有意な関連が認められたことから、心理的な側面に対しても影響を及ぼしていることが考えられる。

HbA1c には有意な関連はみられなかったが、先行研究でも一定の見解が得られていない状況と一致した結果であった。

2. ヘルスリテラシーと心理社会的要因、行動、ヘルスアウトカムとの包括的な関連性

モデル適合度指標は、T1 データで、良好な結果が見られた。T2、T3 データでは許容範囲内であったがモデル適合度は徐々に低下した。これは、T2、T3 での対象者数の減少と各変数同士の相関の変化が原因と考えられる。

一方、14 個のパスで T1、T2、T3 で一貫して有意であることが示された。このうち、ヘルスリテラシーが高いほど糖尿病理解度、自己効力感、医師とのコミュニケーション、服薬アドヒアランスが高いという関連が示された。

ヘルスリテラシーと心理社会的要因を媒介変数とした自己管理との関連では、服薬アドヒアランスは、理解度はやや関連があると考えられるが自己効力感に関しては経由せず、

むしろ直接ヘルスリテラシーの高さが良好な自己管理の実践に結びつくのに対し、運動・食事は、ヘルスリテラシーから自己効力感を経由して、良好な自己管理が行われることが示唆された。

3. 外来における通常の糖尿病治療を受けた 6 か月間の、ヘルスリテラシー並びに自己管理の経時的な変化

ヘルスリテラシー並びに自己管理は 3 時点の間で有意な変化がなく、切片と傾きとの間がほぼ無相関であったことから、T1 のヘルスリテラシー並びに自己管理とその後のヘルスリテラシー並びに自己管理との変化には関連がないことが示唆された。この理由の一つとして、本研究の対象者のベースライン T1 での罹患年数が平均 12 年であったことから、6 か月間というフォローアップ期間中には、ヘルスリテラシーや自己管理の変化が起きづらかったことが考えられる。また、罹患年数が長くなっても対象者の知識や情報を活用する能力であるヘルスリテラシーそれ自体は改善しない可能性が高いと考えられる。ヘルスリテラシー向上のためには情報収集ややりとり、批判的に吟味し自分の生活に活用するなどのヘルスリテラシー向上に焦点をあてた介入が重要である可能性が示された。

以上、本論文は、ヘルスリテラシーが心理社会的要因、医師とのコミュニケーションや自己管理などの行動、ヘルスアウトカムへ及ぼす影響について、縦断的かつ包括的な影響について明らかにした。本研究は、これまで明確にされることのなかったヘルスリテラシーと心理社会的要因を媒介にした自己管理への関連とヘルスリテラシー向上の意義について明らかにし、2型糖尿病患者をはじめとする自己管理を必要とする慢性疾患患者に対する自己管理支援への解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。